

わたしたちに安息を与える方としてのキリスト

聖書：創 1:26, 31—2:2, マタイ 11:28-30, 出 31:12-17

魂に安息を見いだす	<p>マタイ 11:28 すべて労苦し重荷を負っている者は、わたしに来なさい。そうすれば、わたしはあなたがたに安息を与える。</p> <p>マタイ 11:29 わたしは心の柔和なへりくだった者であるから、わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。そうすれば、あなたがたは魂に安息を見いだす。</p> <p>マタイ 11:30 なぜなら、わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」。</p>
安息日の安息	<p>出 20:8 安息日を覚えて、これを聖別しなさい。</p> <p>出 31:13 「イスラエルの子たちに語って言いなさい、『あなたがたは必ずわたしの安息日を守らなければならない。それは、あなたがたの代々にわたる、わたしとあなたがたとの間のしるしであって、わたしがあなたがたを聖別するエホバであることを、あなたがたが知るためである。</p>

I	魂に安息を得る	A-C	魂に安息を得るようにとの召し、安息を得ることの意義
		D-L	安息を得る道：主のくびきを負う、主から学ぶ
II	安息日の安息	A-D	安息日の戒め、実際と原則
		E-J	安息日を守ることの詳細

日	段落、思路	主題	要点
1	魂に安息を得る	魂に安息を得るようにとの召し、安息を得ることの意義	安息を得るようにとの召し 安息を得る意義
2		安息を得る道	主のくびきを負うことは御父のみこころを取ること 主から学ぶ一心が柔和でへりくだっている
3	安息日の安息	安息日の戒めを繰り返す理由と原則	安息日の戒めを繰り返す 安息日の原則
4		第七日に安息し憩われた	神の第七日は安息し憩う日でした 人の第一日は享受の日でした
5		第一日の原則	ペンテコステの日第一日の原則の例証を見ます わたしたちは安息日の原則のしるしを帯びていなければならない
6		安息日を守ることは永遠の契約	永遠の契約 享受と働きの循環

まとめ

魂に安息を得て、働きに安息を得る

魂に安息を得る道：主のくびきを負い、主から学ぶ

働きに安息を得る道：最初に享受があり、そして主と共に働く

魂に安息を得る

I. 「すべて労苦し重荷を負っている者は、わたしに来なさい。そうすれば、わたしはあなたがたに安息を与える。わたしは心の柔和なへりくだった者であるから、わたしのくびきを負い、わたしから学びなさい。そうすれば、あなたがたは**魂に安息を見いだす**。なぜなら、わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである」——マタイ 11:28-30:

A-C:安息を得るようにとの主の召しと安息を得ることの意義

労苦の意味

- A. この**労苦**は、律法の戒めや宗教的規定を守ろうと努力する労苦を指すだけでなく、あらゆる働きにおいて成功しようとして奮闘する労苦も指しています。このように労苦する人はだれでも、常に大きな重荷を負っています。

安息を得るようにとの**主の召し**

- B. 主は御父の道認め、神聖なエコノミーを宣言して御父をほめたたえた後（25-27節）、このような人々が彼に来て**安息を得るようにと、主は召しました**。

安息の意義

- C. 安息は、律法や宗教の下の、あるいはあらゆる働きや責任の下の労苦と重荷から解放されることを指すだけでなく、**完全な平安と全き満足**をも指しています。

D-L:安息を得る道(方法)——**主のくびきを負う/主から学ぶ**

***主のくびきを負うとは、御父のみこころを取ることで、御父のみこころによって拘束されることです**

- D. **主のくびきを負う**とは、御父のみこころを取ることです。それは、律法や宗教のどんな義務によって規制されたり支配されたりすることでもなく、または何かの働きによって奴隷にされたりすることでもなく、御父のみこころによって拘束されることです。

***主から学ぶ——上記のような生活をして、御父のみこころ以外の何も顧慮しませんでした**

- E. 主はそのような生活をして、御父のみこころ以外の何も顧慮しませんでした（ヨハネ 4:34. 5:30. 6:38）。主はご自身を完全に御父のみこころに服従させました（マタイ 26:39, 42）。ですから、主はご自身から学ぶようにと、わたしたちに求めています：

1. 信者たちは、主の模範にしたがって、主のくびき（神のみこころ）を負うことによって、また神のエコノミーのために労苦することによって、彼らの霊の中で主を複写します——11:29 前半. I ペテロ 2:21。
2. 主は、彼の全生涯にわたって、御父に服従し、従順であって、ご自身の服従と従順の命をわたしたちに与えました——ピリピ 2:5-11. ヘブル 5:7-9。
3. キリストは最初の神・人でした。わたしたちは多くの神・人です。わたしたちは、キリストが神に絶対的に服従したことにおいて、またキリストが神をもって極みまで満足したことにおいて、キリストから学ばなければなりません。
4. 神は、ご自身の目に喜ばれることを、イエス・キリストを通してわたしたちの中で行なっています。それはわたしたちが、神のみこころを行なうことができるためです（ヘブル 13:20-21）。神は、ご自身の大いなる喜びのために、わたしたちの内で活動して、願わせ働かせています（ピリピ 2:13）。

***主から学ぶ——柔和、溫柔(反対に抵抗しない)、へりくだり**

- F. 柔和、あるいは溫柔であるとは、反対に抵抗しないことを意味し、へりくだるとは、自分を高く見ないことを意味します。主はすべての反対の中で柔和であり、すべての拒絶の中で心がへりくだっていました。

***主から学ぶ——御父のみこころに完全に服従、御父のみこころをもって完全に満足する**

- G. 彼はご自身を御父のみこころに完全に服従させ、ご自身のために何を行なうことも願わず、ご自身のために何かを獲得しようとして期待しませんでした。ですから、状況がどうであっても、彼は心の中に安息を持っていました。彼は御父のみこころをもって完全に満足していました。

***主のくびきを負い、主から学んで得る安息とは——わたしたちの魂のためであり、内側の安息です**

- H. 主のくびきを負い、彼から学ぶことによってわたしたちが見いだす安息は、わたしたちの魂のためです。それは内側の安息であり、性質において単なる外面的なものではありません。

***主から学ぶ根拠——天然の命ではなく、復活の中でわたしたの命となった主による**

- I. わたしたちが主の模範にしたがって主から学ぶのは、わたしたちの天然の命によってではなく、復活の中のわたしたちの命としての主によってです——エペソ 4:20-21. I ペテロ 2:21。

***主のくびきは御父のみこころです——このようなくびきは、負いやすく、苦痛でない**

***主の荷は御父のみこころを遂行する働きです——このような荷は、軽く、重くない**

- J. 主のくびきは御父のみこころであり、彼の荷は御父のみこころを遂行する働きです。そのようなくびきは負いやすく、苦痛ではありません。またそのような荷は軽く、重くありません。

- K. 「(負い) やすい」というギリシヤ語は、「用いられるのにふさわしい」を意味します。ですか

ら、良い、親切な、柔和な、溫柔な、容易な、楽しいを示し、過酷な、厳しい、険しい、苦痛の反対です。

***結果——主のくびき(御父のみこころ)を負い、主から学ぶなら、魂に安息を見いだします。**

***神のエコノミーのくびきはこのようなものです——神のエコノミーにおけるあらゆる事は重荷ではなく、享受です。**

L. わたしたちは、わたしたちに対する主のくびき(御父のみこころ)を負い、彼から学ぶなら、わたしたちの魂に安息を見いだします。神のエコノミーのくびきはこのようです。神のエコノミーにおけるあらゆる事は重荷ではなく、享受です。

安息日の安息

II. 神の住まいの建造に関する長い記載の後、出エジプト記第 31 章 12 節から 17 節で、安息日を守る戒めが繰り返されています。コロサイ第 2 章 16 節から 17 節によれば、キリストは、安息日の安息の実際です。キリストは、わたしたちの完全さ、安息、平穩、完全な満足です——ヘブル 4:7-9. イザヤ 30:15 前半:

A-D:安息日の戒め、実際と原則

***安息日の戒めを繰り返す理由と原則**

- A. 幕屋を建造する働き^{の命令}の後に、安息日に関する言葉が挿入されています。これが示すのは、建造する者たち、働く者たちが主のために働くとき、どのように主と共に安息するかを学ぶよう、主が彼らに告げたということです。
- B. もしわたしたちが、どのように主のために働くかを知っているだけで、どのように彼と共に安息するかを知らないなら、**神聖な原則**に反して行動しています:
1. 神が第七日に安息したのは、彼がご自身の働きを終えて満足したからです。神の栄光が現されたのは、人が神のかたちを持ち、神の權威が行使されて、神の敵サタンを征服しようとしていたからです。人が神を表現し、神の敵を対処している限り、神は満足し、安息することができます——創 1:26, 31—2:2。
 2. 後ほど、第七日は安息日として記念されました(出 20:8-11)。神の第七日は人の第一日でした。
 3. 神は人の享受のために、あらゆるものを備えていました。人は創造された後、神の働きに加わったのではなく、神の安息の中へと入りました。
 4. 人が創造されたのは、まず働くためではなく、神で満足し、神と共に安息するためでした(参照、マタイ 11:28-30)。安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のために造られたものではありません(マルコ 2:27)。

七日目に安息し憩われた

C. 出エジプト記第 31 章 17 節は言います、「六日の間にエホバが天と地を造り、七日目に安息し憩われた」:

***神の七日目—安息し憩われた**

1. 安息日は神にとって安息であっただけでなく、憩いでもありました。
2. 神は彼の創造の働きが完成した後、安息しました。彼は御手のわざを見つめ、天、地、すべての生き物、特に人を見て、「非常に良い!」と言いました——創 1:31。
3. 神は人のゆえに憩われました。神がご自身のかたちに靈のある人を創造したのは、人が彼と交わりを持つことができるためでした。ですから、人は神の憩いでした——26 節, 2:7. 参照、ヨハネ 4:31-34。
4. 神は人類を創造する前、「独身」でした(参照、創 2:18, 22)。神は人が彼を受け入れ、彼を愛し、彼で満たされ、彼を表現して彼の妻となることを願いました(Ⅱコリント 11:2. エペソ 5:25)。神は未来の永遠において、妻、すなわち新エルサレムを持ち、それは小羊の妻と呼ばれます(啓 21:9-10)。
5. 人は憩わせる飲み物のようであって、神の渴きをいやし、彼を満足させました。神は彼の働きを終えて、安息し始めた時、人を彼の同伴者として持ちました。

***人の第一日—享受の日**

6. 神にとって、第七日は安息と憩いの日でした。しかしながら、神の同伴者である人にとって、

安息と憩いの日は第一日でした。人の第一日は享受の日でした。

***わたしたちが享受を得る前に、神はわたしたちに働くことを求めません**

D. わたしたちが享受を得る前に、神はわたしたちに働くことを求めません。これは神聖な原則です。
わたしたちは彼と共に、また彼に対して満ち満ちた享受を持った後、彼と共に働くことができます：

1. もしわたしたちが、どのように神と共に享受を持つか、どのように神ご自身を享受するか、どのように神で満たされるかを知らないなら、どのように彼と共に働き、彼の神聖な働きの中で彼と一になるかを知りません。人は、神が彼の働きの中で完成したものを享受します。

***ペンテコステの日 第一日の原則の例証を見ます**

2. ペンテコステの日に、弟子たちがその霊で満たされたことは、彼らが主に対する享受で満たされたことを意味します。彼らがその霊で満たされていたので、他の人は、彼らがぶどう酒に酔っていると思いました——使徒 2:4 前半, 12-13。
3. 実は、彼らは天のぶどう酒に対する享受で満たされていたのです。彼らはこの享受で満たされた後はじめて、神との一の中で神と共に働き始めました。ペンテコステは第八週の第一日でした。ですから、わたしたちはペンテコステの日に関して、第一日の原則を見ます。
4. 神にとっては、働いて安息する事柄です。人にとっては、安息して働く事柄です。

E-J:安息日を守ることの詳細

***神の民として神を必要としているというしるしを帯びる**

E. わたしたちは召会を建造するという神の神聖な働き（幕屋を建造する働きで予表される）を行なうとき、わたしたちが神の民であり、神を必要としていることを示すしるしを帯びなければなりません。その時わたしたちは、神のために働くだけでなく、神と一になることによって神と共に働くことができます。神はわたしたちの働く力、また労苦する活力となります：

神に享受、力、活力、すべてでとっていただく必要があるというしるしを帯びる

1. わたしたちは神の民であって、神にわたしたちの享受、力、活力、すべてでとっていただく必要があるというしるしを帯びているべきです。それは、わたしたちが神のために働き、彼を尊び、彼の栄光を現すことができるようになるためです。

神の同労者であるというしるし（ペテロの事例）

2. 安息日が意味するのは、わたしたちが神のために働く前に、神を享受し、神で満たされる必要があるということです。ペテロは、彼を満たす神、すなわち彼を満たす霊によって福音を宣べ伝えました。ですから、ペテロは神の同労者であるというしるしを持っており、彼の福音の宣べ伝えは神にとって誉れと栄光でした——14 節。

神と共に安息し、神を享受し、神で満たされているというしるし

3. 神の民として、わたしたちが帯びなければならないしるしとは、わたしたちがまず神と共に安息し、神を享受し、神で満たされているということです。それからわたしたちは、わたしたちを満たす方と共に働きます。さらに、わたしたちは神と共に働くだけでなく、神と一である者として働きます。

言葉を供給するためのわたしたちの力、活力、すべてであるというしるし

4. わたしたちは神の民に語る時、わたしたちの主が、言葉を供給するためのわたしたちの力、活力、すべてであるというしるしを帯びることを、常に求めなければなりません——II コリント 13:3. 使徒 6:4.

***安息日を守ることはまた永遠の合意、あるいは永遠の契約です**

F. 安息日を守ることはまた永遠の合意、あるいは永遠の契約であり、わたしたちがまず神を享受し神で満たされることによって、それから神のために、神と共に、神との一の中で働くことによって、神と一であることを、神に保証します——出 31:16：

1. わたしたちが自分自身で主のために働いて、彼を飲んで食べることによって彼を取り入れ享受することがないのは、厳粛な事柄です——参照、I コリント 12:13. ヨハネ 6:57.
2. ペテロはペンテコステの日語っていた時、内側でイエスにあずかり、彼を飲んで食べていました。

***安息日はまた聖別の事柄でもあります**

G. 安息日はまた聖別の事柄でもあります（出 31:13）。わたしたちは主を享受し、それから彼と共

に、彼のために、彼と一になることによって働くとき、自然に聖別され、俗的なすべてのものから神へと分離され、神で浸透されて、肉的で天然的なものはすべて置き換えられます。

***主を享受せず、主と一になって主に仕えることがない奉仕は霊的な死とからだの交わりを失う**

H. 召会生活の中で、わたしたちは多くの事を行なっても、まず主を享受することがなく、また主と一になることによって主に仕えることがないかもしれません。そのような奉仕の結果は霊的な死と、からだの交わりを失うことです（14-15 節）。

***神の住まいに関するあらゆるものは、わたしたちを主の安息日と、その安息と憩いに導きます**

I. 神の住まいに関するあらゆるものは、わたしたちを一つの事柄に導きます。それは主の安息日と、その安息と憩いです。召会生活の中で、わたしたちは幕屋の中におり、幕屋はわたしたちを安息に導き、神の定められた御旨と彼が行なったことに対する享受に導きます！

***神に対する享受をもって開始し、その期間、継続して神を享受することによって憩いを持つ**

J. 幕屋とそのすべての調度品を建造する働き（召会を建造する主の働きを予表する）は、神に対する享受をもって開始し、その期間、継続して神を享受することによって憩いを持つべきです。この事が示すのは、わたしたちが神のために働くのは自分自身の力によってではなく、神を享受することによって、また神と一になることによってであるということです。これがわたしたちの霊の中の内なる安息としてのキリストをもって、安息日の原則を守ることです。